

子どもに対する保護者（親）のコミュニケーション方法についての考察

A consideration of the way parents send messages to children

1K08A191 - 5 堀内大輔

指導教員 主査 堀野博幸 先生 副査 吉永武史 先生

I. 序論

児童の体力の低下や学力の低下、児童虐待など、児童（子ども）にかかわる事柄が大きな問題となっている。平成22年度全国体・運動能力、運動習慣等調査によると、昭和60年ごろを境に子ども達の走る力、投げる力などは、長期的に低下傾向にあるという結果が出ている。2009年のPISA調査で若干盛り返したものの、読解力を除いては過去最高位の得点には遠く及ばない結果である。児童虐待についても、被虐待者で小学生が最も多く、虐待者は「実母」、「実父」が多くを占めている。限られた時間の中でいかに保護者（親）が子どもとかわかっていくのかを考え、保護者（親）が発信するコミュニケーションの質を上げるために子どもに対するコミュニケーション方法について考察することを目的とする。

II. 本論

1. コミュニケーションについて

コミュニケーションとは、「社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと。言語・文字・身振りなどを媒介として行われる（大辞泉）」と定義される。児童は保護者（親）から多く影響を受けていることから、保護者（親）も「話す」ということにおいて、特に言語能力が十分でない児童には、家庭教育についての報告（文部科学省、「社会の宝」として子どもを育てよう！（報告）、2002）での「子どもを育てる上では、過保護や過干渉、あるいは無関心や放任といった極端な養育態度にならないよう心がけて」聞く、ほめる、叱るといった主に3つのことを効果的に行うことが重要である。

2. 「ほめ」について

「矯正の・具体的フィードバック」、「肯定的・一般的フィードバック」、「矯正の・一般的フィードバック」の順で児童の役に立ったと受け止められた。保護者（親）にそこまでの専門知識が無い場合でも、「即時

性」をもって肯定的な言葉を発することで受け入れられやすくなる。ただ、外的報酬を与えることによってかえって意欲が低下するというアンダーマイニング効果に注意する必要がある。

3. 「叱り」について

有効な叱りの要素は、「短時間である」、「直接的な叱り、または望ましくない行為の指摘」、「理由を明示する」など「1~4年生には感情的な叱りではなく理由を明示して叱る」、「5~6年生には子どもの責任の有無を考え、ある場合は言い分を受容したうえで理由を明示してもしくは感情的に叱り、ない場合は受容的態度を示して叱る」、である。

4. 質問法について

オープン・クエスチョンやクローズド・クエスチョンを使い「即時性」を作り出し、ほめたり、叱ったりする。子どもになるべく多く話させるために「察しの悪い人」を演じながらオープン・クエスチョンも用い、もし言葉に詰まって完全に止まってしまったらクローズド・クエスチョンで段階を経ながらそのオープン・クエスチョンに答えさせる。このように子どもからの発信を導く。

III. 結論

ベネッセの調査では小学生とその両親の間の会話が増えており、さらに中学、高校と年を経るにつれて父親との会話が增多、母親との会話の差が小さくなっていることをふまえると、親子の仲が悪いわけではないので、「質問法」に基づき「ほめ」、「叱り」、「質問法」を駆使して保護者（親）発信のコミュニケーションを取るとコミュニケーションの質も上がっていくだろう。また今後は義務教育段階の言語活動だけでなく、十分にコミュニケーションが取れていない保護者（親）や、甘やかし傾向のある保護者（親）に対して、教師あるいは指導者の立場から家庭での教育などについても指導、助言をする必要がある。